慢性甲状腺機能障害の疫学と予後に関する研究報告書

熊本大学医学部小児科　　松田　一郎
藤本　茂紘

1. クレチン症の母親の抗甲状腺抗体の検索

慢性甲状腺炎の母親より甲状腺機能低下症の児が誕生することは知られている。そこで母子間の抗甲状腺抗体の関連性について検討した。その結果スクリーニング終了した新生児乾燥濾紙血3,812名中，陽性者は165名（4.3％）であった。児は生後5ケ月で陰性化したが母親は上昇した。従って新生児乾燥濾紙血の抗体は母親由来と考えられる。165名中7名が外来受診し2名が一過性高TSH血症であった。次にクレチン症マス・スクリーニングで陽性，疑陽性を示した新生児乾燥濾紙血中の抗体は50名中4名（8.0％）が陽性であった。2名がクレチン症，2名が一過性高TSH血症であった。次にマス・スクリーニング前に発見治療中のクレチン症母子の抗体検査では7名中1名（14.2％）の母親が陽性であった。以上より母親由来の抗甲状腺抗体が新生児の甲状腺機能にどの様な影響を与えているかは不明であるが，抗体陽性の母親より甲状腺機能異常の児の発生は稀なものでないと考える。

2. 南九州，沖縄地区におけるクレチン症マス・スクリーニングの状況

九州5県（佐賀，大分県を除く）と沖縄地区は現在までに363，157名の検査が行なわれた（昭和56年12月末現在）。その結果，陽性者52名，疑陽性者21名が発見されている。陽性者の頻度は1/6，984であるが，鹿児島，沖縄地区は3,000台，中九州は10,000台の割合であった。南九州（熊本，宮崎，鹿児島）と沖縄地区は陽性者29名，疑陽性者10名が発見され，アンケートで返答えた22名と6名について検討した結果，クレチン症18名，一過性高TSH血症7名，一過性甲状腺機能低下症2名であった。各々の臨床的検討では在胎週数は差異が認められないが，生下時体重はクレチン症において小さい。症状，所見においてもクレチン症に多く認められた。DFC (Distal Fenural Center) はクレチン症，一過性甲状腺機能低下症で出現していない症例がみられたが一過性高TSH血症では全員正常であった。地域により発症頻度の異なる原因は不明であった。今後栄養，遺伝そして自己免疫などについて検討してゆく予定である。

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

1.クレチン症の母親の抗甲状腺抗体の検索

慢性甲状腺炎の母親より甲状腺機能低下症の児が誕生することは知られている。そこで母子間の抗甲状腺抗体の関連性について検討した。その結果スクリーニング終了した新生児乾燥濾紙血 3,812 名中,陽性者は 165 名(4.3%)であった。児は生後 5 ケ月で陰性化したが母親は上昇した。従って新生児乾燥濾紙血の抗体は母親由来と考えられる。165 名中 77 名が外来受診し 2 名が一過性高 TSH 血症であった。次にクレチン症マス・スクリーニングで陽性,疑陽性を示した新生児乾燥濾紙血中の抗体は 50 名中 4 名(8.0%)が陽性であった。2 名がクレチン症,2 名が一過性高 TSH 血症であった。次にマス・スクリーニング前に発見治療中のクレチン症母子の抗体検査では 7 名中 1 名(14.2%)の母親が陽性であった。以上より母親由来の抗甲状腺抗体が新生児の甲状腺機能にどの様な影響を与えているかは不明であるが,抗体陽性の母親より甲状腺機能異常の児の発生は稀なものでないと考える。